

令和 5 年 5 月 13 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K03284

研究課題名(和文) ポジティブ心理学的観点による歴史的トラウマの継承と平和教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Transmission of historical trauma and development of peace education program from the perspective of positive psychology

研究代表者

上手 由香 (Kamite, Yuka)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授

研究者番号：20445927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、原爆被爆による次世代への心理的影響について、ポジティブ心理学的観点から検討すること、新たな心理学的平和教育プログラムの構築を目的とした。ポジティブ心理学的観点としては、本研究では加害者への許し・寛容性に着目した。質問紙による調査結果から、被爆者の子孫が有するポジティブな資質として、自分を傷つけた者に対する感情面あるいは行動面における寛容性が見られる可能性が示された。また、被爆2世と3世では、健康不安において異なった反応を有する可能性が示された。心理学的平和プログラムの構築では、複数の心理的課題に対し、マインドフルネスを用いたプログラムを実施し、一定の効果を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

原爆が人類史上に残る歴史的な被害体験であるにも関わらず、その子孫にどのような影響をもたらすかは、心理的影響についてはほとんど目が向けられてこなかった。本研究は被爆者の子孫に対する心理的影響について、ネガティブな面だけでなく、ポジティブな側面にも着目したものであり、歴史的トラウマからの回復やレジリエンスに対する重要な知見を提供できたと考えられる。また、本研究が着目した加害者への許しについては、原爆や戦争の被害者だけでなく、より日常的な対人関係における被害体験からの回復やメンタルヘルスの向上にも重要な視点であり、社会的意義という点からも、今後幅広く検討することが望まれる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the psychological effects of the atomic bomb on the next generation from a positive psychological perspective and to construct a new psychological peace education program. From a positive psychological perspective, this study focused on forgiveness toward the perpetrators. The results of the questionnaire survey indicated that the descendants of atomic bomb survivors may have positive qualities such as emotional and behavioral forgiveness toward those who have harmed them. In addition, second- and third-generation atomic bomb survivors may have different reactions to health concerns. In the construction of a psychological peace program, some mindfulness-based programs were implemented for several psychological issues, and a certain level of effectiveness was obtained.

研究分野：臨床心理学

キーワード：被爆2世・3世 原爆 許し ト라우マ ポジティブ心理学 マインドフルネス 平和 健康不安

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

広島・長崎の原爆による被害が、被爆者のみでなくその子どもにどのような影響をもたらすかは、従来の研究では、主に遺伝的側面に終止しており、心理的影響についてはほとんど目が向けられてこなかった。被爆2世の心理面に着目した研究は国内外を問わず、わずかながらであり、被爆2世の心理面に向けられた関心は、その被害の歴史的甚大さに比べ、あまりにも過小であると言わざるを得ない状況であった。申請代表者は国内でも臨床心理学の専門的研究としては初となる、被爆2世を対象としたインタビュー調査、被爆2・3世に対する質問紙調査を実施することによって、多くの被爆者は、子や孫に対して、深刻でネガティブな心理的影響を与えなかった可能性が示され、被爆者個人や社会のレジリエンスが発揮されていたと考えられた (Kamite, 2017)。原爆被爆について、負の影響を明らかにすることは必須であるが、次世代に至りそれを乗り越えるための心理的働きが生じる可能性を含め、多面的に検討することは、私たちが深刻な被害体験の後、どのように回復しうるのかを明らかにする上で重要であると考えられる。そこで本研究では、こうしたトラウマを乗り越えるための心理的働きとして、ポジティブ心理学の観点に着目した。ポジティブ心理学とは、精神病理や障害など、ネガティブな側面に焦点を絞るのではなく、幸福感や愛他性など、人間のポジティブな側面を対象にするものである。また、平和に関する心理学的研究に関しては、国外では平和心理学 (Peace Psychology) として位置づけられ、戦争やテロに対する価値観など、様々な知見が積み重ねられている。そこで、本研究では日本語における平和の認識を測定する尺度を作成し、被爆2・3世を含め、親世代・個人のトラウマ体験の有無、性格特性など、他の要因との関連を検討する。本研究の知見を広く社会に還元する機会として、平和教育に着目する。日本における平和教育は、これまで戦争経験の伝承など、戦争に関するものが主であったが、最近では、国際理解や環境問題などといった問題も取り入れるなど、新しい形が模索されている。本研究では、新たな挑戦として、心理学的アプローチを取り入れた、これまでの日本の平和教育の中心的な方法であった戦争経験の継承という枠組みとは異なる新たな平和教育プログラムの開発を目指すこととした。

2. 研究の目的

研究開始当初の本研究の目的として、以下の3点を検討する予定であった。1) 原爆被爆体験の次世代 (2・3世) への心理社会的影響について、負の側面だけでなく、世代を超えてトラウマ体験を乗り越えてきた心理的働きに着目し、ポジティブ心理学の観点から検討する。2) 平和に対する認識を測定する尺度を開発し、個人の平和の認識と状態に関連する要因を、親世代・個人のトラウマ体験の有無や性格特性などの観点から検討する。3) 心理学の知見を取り入れた心理学的平和教育プログラムを開発する。

3. 研究の方法

研究1: 原爆被爆体験の次世代への心理社会的影響の検討新型コロナウイルス感染拡大による影響で、面接調査の実施が困難となったため、研究方法の再検討を行った。さらにロシア・ウクライナ戦争による社会情勢の悪化は、核兵器の使用も懸念され、パンデミックと合わせて、被爆者の子孫である被爆2・3世は特有の心理的影響が生じた可能性が考えられた。そこで、本研究では、これらの新たな世界的危機における心理的反応についても、加えて検討することとした。以上のことから、研究1はオンライン調査により、被爆者の子孫である被爆2・3世とその同世代の対称群に対して、健康不安や戦争への認識、メンタルヘルスへの影響を比較した。

研究2: 研究2においては、平和心理学において重要なテーマの一つである Forgiveness (許し・寛容性) に焦点を当て、日本語版尺度の開発を行うこととした。研究2-1として、日本語版 Forgiveness 尺度の開発と信頼性・妥当性を検討した。研究2-2として、日本語版 Forgiveness 尺度を用いて、被爆者の子孫とそうでないものとの間で、許し・寛容性に差が見られるのかを検討した。

研究3: 研究3においては、ポジティブ心理学や臨床心理学的観点から、マインドフルネスを用いた心の平和に関するプログラムの開発を行った。対象としたのは、児童期～青年期にあたる児童養護施設入所児童・生徒および大学生・大学院生であった。

4. 研究成果

本研究の主な成果を、研究1～3ごとに述べる。

(1) 研究1

研究1では、COVID-19 パンデミックおよびロシア・ウクライナ戦争の被爆者の子孫の心理的影響について検討することを目的として、パンデミック前である2017年に実施したオンライン調査の結果と、2022年8月に実施したオンライン調査の結果を比較した。心理的影響の指標として、それぞれの調査で、抑うつ (CES-D)、健康不安 (SHAD)、戦争参戦への認識を測定した。対象者は被爆2世、被爆3世、対称群であった。2022年の調査において、抑うつは各群で有意差はなかった。これは、2017年と同様であった。一方、2022年調査では、被爆3世は、過去の

【1 研究目的、研究方法など (つづき)】

病歴にかかわらず、健康不安が有意に高いことが示された (Figure 1)。このことは、被爆者の孫が COVID-19 パンデミックのような健康上の脅威に対して不安を増大させる可能性を示した。さらに、パンデミック前の 2017 年における被爆 2・3 世と対称群による調査結果と 2022 年の結果の比較を行った。その結果、パンデミック前と比較して、パンデミック後において被爆 3 世群は他のグループよりも身体的健康に対する不安が有意に高かった。一方、被爆 2 世は、2017 年、2022 年ともに、他のグループより自身の健康について心気症傾向が強かった。戦争参戦への認識については、時期と群での差は示されなかった。

これらの結果から、パンデミックとロシア・ウクライナ戦争による心理的影響のうち、抑うつと戦争参戦への認識においては、被爆者の子孫であるかどうかは、影響が見られなかった。一方、被爆 2 世と 3 世では健康不安に対して異なる反応を示す可能性が示された。特に、被爆 3 世はパンデミック時に健康不安の増大を示したが、被爆 2 世はパンデミックに関係なく心気症的な傾向を示すことが特徴的であった。

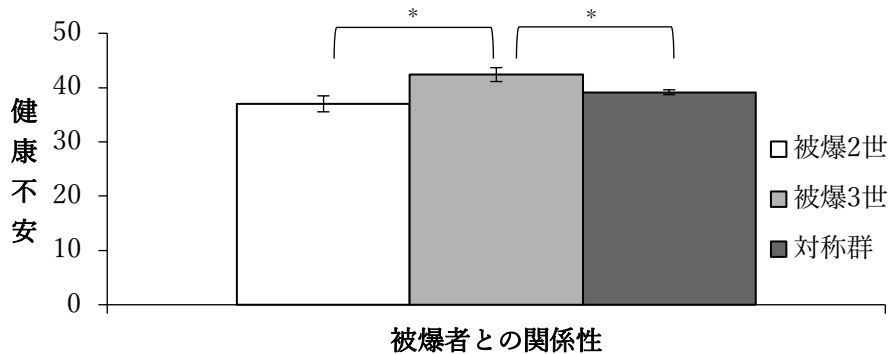


Figure 1. 健康不安の比較 (2022 年調査)

(2) 研究 2

本研究では、平和に関する重要なテーマとして、「許し」に着目し、調査を行った。許しは、寛大さ・回復・人間性を高めるものなどポジティブなものとして認識されており、対立や紛争の解決における、重要な概念の一つとされる。本研究では、その中でも個人が過去の被害体験に対して、加害者をどの程度許しているかを測定する尺度である Enright Forgiveness Inventory (EFI) を用いることとした。本研究では、日本語版 EFI を作成して調査に用いることで、日本における「許し・寛容性」と被爆者の子孫への影響を検討した。日本語版尺度作成にあたり、2021 年に原著者 (Enright, R. D.) に許可を得て、翻訳を行った。作成した尺度をもとに、2022 年 3 月に大学生と社会人成人を対象にオンライン調査を実施し、尺度の信頼性・妥当性を検討した。さらに、2022 年 8 月に被爆 2・3 世と対称群に対して EFI を用いたオンライン調査を実施した。その結果、被爆 2 世と同世代の対称群に比べ、許し感情が高かった。また、被爆 3 世は同世代の対称群に対して、許しの行動が高いという結果が示された。このことから、被爆 2 世は、被爆者の子孫でない人に比べて、自分を傷つけた加害者に対して、感情面でより肯定的にとらえていることが明らかとなった。また、被爆者 3 世は、被爆者の子孫でない人に比べて、加害者に対してより肯定的に行動している可能性が示された。これらのことから、被爆者の子孫は、自分を傷つけた加害者に対して比較的に寛容であるなど、ポジティブな資質を有している可能性が示唆された。

(3) 研究 3

日本における平和教育は、戦争体験の学習や継承を目的としたものが主流であったが、近年、戦争だけでなく差別や偏見といった構造的暴力、いじめなど日常での排斥的行為の解決に取り組むなど、包括的な視点での平和教育も広がりつつある。本研究では、包括的な視点での平和教育の一環として、ポジティブ心理学や臨床心理学的観点から、マインドフルネスを用いた心の平和に関するプログラムの開発を行った。マインドフルネスとは、「今ここでの経験に評価や判断を加えることなく、能動的な注意を向ける」心理状態のことである (Kabat-Zinn, 1994)。マインドフルネスはさまざまな分野で有効性が確認されているが、少年院での実践により感情統制や攻撃性の低減が認められたという報告がなされている。こうした知見を参考に、研究期間中に次の 2 つの介入プログラムを実施した。児童養護施設におけるマインドフルネスの実践では、児童養護施設に入所している児童・生徒 9 名 (男子 5 名、女子 4 名、 $M=13.33$ 歳 ($SD=1.41$)) に対し、マインドフルネスのプログラムを実施し、感情制御と問題行動に対する効果を検討した。その結果、施設スタッフによる他者評定では、介入前後で仲間関係の問題の減少や向社会的な行動の増加が認められた。また、大学生を対象とした介入では、環境からの影響の受けやすさに着目し、感覚処理感受性 (Sensory-Processing Sensitivity: 以下 SPS とする) の高い者を対象に、マイ

【1 研究目的、研究方法など (つづき)】

ンドフルネスによる介入を行った。これまでの研究で、SPS が高いほど不安や抑圧、ストレスが高まることが示されており、海外では SPS の高い者に対するマインドフルネスによる介入の効果が実証されている。本研究でも、様々な外的な刺激に対して心の平穏を維持することを目的に、日本における SPS の高い者を対象としたマインドフルネスの介入を行った。介入群には 18—24 歳 ($M = 20.7, SD = 1.92$) の 12 名、統制群には 18—30 歳 ($M = 21.2, SD = 3.11$) の 13 名が参加した。その結果、介入群において選択的注意および転換的注意能力が向上するという効果が示された。本研究の結果から、SPS の高い人に関連する心理的症状に対して、マインドフルネスが一定の効果をもつ可能性が示唆された。

(4) 今後の課題と展望

本研究において明らかになったこととして、被爆者の子孫である被爆 2・3 世への心理的影響として、被爆者の子孫であることと抑うつについては、関連が見られなかったことから、原爆被爆による心理的影響としては、先行研究と同じく大きなネガティブなメンタルヘルスへの影響は示されなかった。一方、健康不安については、被爆 2 世と 3 世では異なった影響が生じている可能性が示された。被爆 2 世については、身体的な不調に囚われやすい心気症的傾向が見られたものの、Covid-19 パンデミックのような、健康への脅威と体験されるような社会的危機に対する脆弱性は示されなかった。一方、被爆 3 世は Covid-19 パンデミック時に、被爆者の子孫でない人よりも健康不安が高まった可能性が考えられ、健康への脅威に対する脆弱性を有する可能性が考えられた。また、研究 2 で着目した Forgiveness (許し・寛容性) の観点からは、被爆者 3 世は、被爆者の子孫でない人に比べて、加害者に対してより肯定的に行動している可能性が示された。これらのことから、被爆者の子孫は、自分を傷つけた加害者に対して比較的寛容であるなど、ポジティブな資質を有している可能性が示唆された。被爆体験も含め、戦争が次世代に与えた心理的影響として、許しの観点から更なる詳細な検討を行うことで、国家やコミュニティレベルでの加害と被害を抱えたトラウマ経験に対するレジリエンスを明らかにすることができると考えられる。また、研究 3 を通して、複数の心理的課題に対するマインドフルネスの効果を実証することができた。しかし、本研究では Covid-19 パンデミックの影響もあり、様々な制約が生じたため、マインドフルネスを用いた平和教育プログラムについては、単発的に実施した段階に過ぎない。今後は教育現場など、より幅広い枠組みで実施可能な心理学的平和教育プログラムの構築が目指される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 上手 由香	4. 巻 20(2)
2. 論文標題 原爆体験が被爆者と次世代にもたらした心理的影響 –被爆二世・三世へのトラウマの継承とは?–	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 トラウマティック・ストレス	6. 最初と最後の頁 136-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 花岡 麻衣, 平川 真, 増田 成美, 上岸 光太, 上手 由香	4. 巻 22
2. 論文標題 HSPの特性不安, 抑うつ, ストレスにおけるマインドフルネスの効果の検討 : 感情制御と注意制御からみた調整効果の検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 広島大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 97-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/53685	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 前野 凜・中山 恵里・増田 成美・岡田 ほのか 上岸 光太・花岡 麻衣・下本 有紀保・上手 由香	4. 巻 22
2. 論文標題 児童養護施設における マインドフルネスの介入とその効果の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/52175	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Kamite, Y., Kitani, T., Ikeda, T., Abe, K., Kabir, R. S., & Morishima, T.	4. 巻 136
2. 論文標題 Survey and comparison of psychological factors between descendants and non-descendants of survivors of the atomic bomb: Generational differences in mental health indicators.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Psychiatric Research	6. 最初と最後の頁 398-401
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jpsychires.2021.01.043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Yuka Kamite, Narumi Masuda, Kota Jogan, Takuya Fujikawa, Kazuaki Abe, Koji Kamite
2. 発表標題 Psychological effects on the descendants of atomic bomb survivors during the COVID-19 pandemic
3. 学会等名 the 18th European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Narumi Masuda, Kota Jogan, Yuka Kamite
2. 発表標題 Psychosocial effects on descendants of atomic-bomb survivors: Forgiveness in interpersonal relationships
3. 学会等名 the 18th European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 上手 由香
2. 発表標題 戦争の記憶とトラウマの次世代への影響
3. 学会等名 第22回日本トラウマティック・ストレス学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tomoko Kitani, Yuka Kamite
2. 発表標題 Preliminary study of ideas of peace among Japanese individuals.
3. 学会等名 the 6th World Congress of Positive Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuka Kamite, Tomoko Kitani, Koji Kamite
2. 発表標題 Intergenerational transmission of trauma and post-traumatic growth with the second generation of atomic bomb survivor.
3. 学会等名 the 6th World Congress of Positive Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木谷 智子 (Kitani Tomoko) (70816230)	比治山大学・現代文化学部・講師 (35410)	
研究分担者	安部 主晃 (Abe Kazuaki) (80804319)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・助教 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------